

## 6.4 教育成果のあり方

### 進捗状況報告

1. 教室や図書館などでの机上だけではなく、学生自身が自主的に学外に出てインタビュー、実地調査などを通して学習するよう指導している。また、講義期間中に、あるいは夏季休暇での研究合宿などを利用して、研究テーマに関連する企業公的機関などを訪問し、訪問先スタッフとの討論を行うゼミが多数見られる。さらに学生の自主的な研究会を促進することも有用であろう。
2. 定期試験のみならず、学期中の課題レポート、小テスト、発表、中間および期末レポートなど、多様な方法で学生の理解を確認するよう努力している。合わせて、担当者のオフィスアワーを利用して、質問学生を指導している。また必修科目については、質問学生には、大学院生が答える制度（時間と場所）を設けて、学生の理解をより確実なものとするよう努力している。なお、履修科目登録の制限が2005年度入学生から厳しくなったが、その成果を検証することが必要であろう。
3. GPA制度を2005年度入学生より実施し、学生が成績向上への努力を高めるようにしている。今後、そのGPA制度の実施結果を検証し、そしてまたそれを今後の教育の工夫に活かすことが求められる。
4. 6.3で言及したように、様々なゼミナール活動の改善・工夫が取り組まれている。例えば、国内外の他大学との合同研究会、研究合宿、企業訪問、学外者の講演、サブゼミの開講などは自主的に行われている。今後、こうした取り組み（特に外国大学との合同研究会）を学部として支援・促進するために、何らかの制度的工夫の検討も必要であろう。改善すべき課題として、まず、2年次以上の演習には代替制度があるために、演習を選択しない学生に対して学習指導面でチューター制度などの個別指導の工夫が必要であるが、現時点では実施されていない。次に、一定の学力に到達しないまま研究演習入門を迎える学生がいることも課題である。学部独自の共通テストの実施など、ゼミを始める前に必要最小限の学力を確保しておく必要があり、そのための制度検討が求められる。さらに、ゼミの研究内容とコースが一致しない学生が多いので、ゼミの選択科目制・定員制など何らかの対策が求められる。
5. 全体の研修のみならず、分野の特殊性を考慮して、随時分野ごとに集まり、教育の仕方、成績評価などについて話し合い・研修が行われている。

### 学内第三者評価

2003年目標のうち、授業時間外の学習促進については、順調に進んでいる。ただ、履修科目登録の制限の成果検証とGPA制度の実施結果の検証とその教育への活用は、今後の実施に期待される。

ゼミ活動の改善・工夫での多様な自主的な試みは評価でき、今後は学部が支援・促進の制度的工夫に取り組むことが望まれる。また、演習を選択しない学生へのチューター制度、一定の学力に到達しないまま研究演習を迎える学生への対応、さらにゼミの研究内容とコースが一致しない学生が多いことに対するゼミの選択科目制・定員制など、改善すべき課題が挙げられているが、なかでも、ゼミの研究内容とコースとの不一致の解消はコース制の意義が問われることから、早期に具体化することが望ましい。最後に、分野の特殊性を考慮した教育方法や成績評価などの研修成果を教育に反映することが期待される。

なお、特別委員からは以下の意見があった。

・進捗状況報告4に記載された「改善すべき課題」は、早急な対応が必要と思われる。その他の点では諸課題に熱心に取り組まれていると評価できる。

また、一般にGPAは、次の2点で利用されることが多いようである。

(1) 履修登録しても受験せず、単位を取得しなかった科目の成績を「不可」と同じにみなすことによって、学生が過剰な登録をしなくなる。またその結果、クラスサイズが適正化される。

(2) GPAの成績がふるわない学生に対し、早めに学修や生活面の指導をすることにより、留年や退学にいたる事態を予防する。

学生のGPAに対する認識が低いようであれば、進級の要件にすることで(1)の効果が出てくるのではないかと。

北海道大学などでは、GPAを活用することにより、学生の適正履修が進み、理系学部の実験実習科目の予習が十分におこなわれるようになったとか、図書館の利用が格段に多くなった、などの好結果が得られているようだ。